

【団体名】 THE アート・プロジェクト多文化読み聞かせ隊

事業報告書

<p>事業名</p>	<p>アートを通じたワークショップで障害者と健常者が交流する事業</p>
<p style="text-align: center;">【計画時の事業内容】</p> <p>【事業内容】 一回のワークショップの例</p> <p>① リズム遊び(ダンス体験) 参加者が輪になって、音楽に合わせて身体を動かしてダンスをする。みんなで作る輪が小さくなったり、大きくなったり、または、ステップを踏みながらリズムを楽しむ。</p> <p>② 色遊び(水彩体験) 全員テーブルについて、3色の水彩絵の具を使って色の体験をする。専用の画用紙は水に十分に濡らしておいて使う濡らし画法を用いる。それぞれが、一色ずつの絵の具を使ってひとつひとつの色との出会って混じり合う様子や広がりなどの体験を楽しむ。先ほどのダンスの動きからも、色彩の中に動きのあることなどを講師により示唆しながら進める。</p> <p>③ 音楽的な体験 絵の具が乾くまで、全員で歌を歌う。または、ライアーの演奏を聴く。</p> <p>④ 最後に、全員の絵を互いに見せ合う。講師は感想を述べる</p> <p>【開催時期】実施期間は、10月から2月まで、月に1回。1回2時間程度、3回実施する。</p> <p>【場所】カフェイズミ、および高津養護学校の学校開放や市内の公共施設等を利用する。</p> <p>【対象者】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がいのある方、また障がいのある方との交流に興味のある健常者の方。 ・募集方法は、当団体で進めている『みんなで作ろうお話の世界(市民公益活動助成金事業)』、Two-3(障害者ソフトボールクラブ)、市内の障害者余暇活動参加者等に呼びかける。また市立支援学校や県立養護学校、関係機関にも呼びかける。この他、チラシ、フェイスブック、口コミなどを通じて新たな参加者も募集する。障害のある方だけでなく、興味関心のある一般の方も広く募集し、互いの交流をはかるための事業が成立するようにしていく。 ・募集期間は10月から2月まで随時呼びかけ、開催日には随時参加できる形態とする。連続して参加、単発での参加にも対応する。 	<p style="text-align: center;">【実施結果(成果)】</p> <p>第1回目 11月19日 カフェイズミ 参加者 障害者5名 健常者5名 講師 角口さかえ 「いろとおとの体験」 ①リズム遊び(ダンス体験) ②色遊び(水彩体験) ③音楽的な体験</p> <p>第2回目 1月28日 カフェイズミ 参加者 障害者6名 健常者2名 講師 角口さかえ、工藤雅代 「いろとおとの体験」 ①リズム遊び(ダンス体験) ②色遊び(水彩体験) ③音楽的な体験</p> <p>第3回目 2月25日 カフェイズミ 参加者 23名(障害者4名) 講師 角口さかえ、工藤雅代 「いろとおとの体験」 ①リズム遊び(ダンス体験) ②色遊び(水彩体験) ③音楽的な体験</p> <p>参加者からは「楽しかった。癒された。またやりたい。」等の感想を得た。</p>

【事業の実施効果】	【実際の効果と課題】
<p>一回ごとに、それぞれのジャンルの講師1～2名を招いて実施する予定。</p> <p>一連のさまざまなジャンルのワークショップを実施することで、どんな障害の人も楽しむことができる。(例: 視覚障害のある方は、音楽やダンスのワークショップも楽しめる 等) 一回のワークショップに、水彩と音楽療法、ダンスなどを組み合わせることでさらに効果が増すことが期待される。</p> <p>絵画(主に水彩)のワークショップでは、色や形を視覚的に体験し、音楽(音楽療法など)からは、聴覚を通じた体験、ダンスでは身体を動かすことで心とのバランスをはかることができる。</p> <p>数回のワークショップにより、障害者、健常者が互いに交流しつつ、さまざまな芸術体験を共有することができる。どのワークショップも単発でも参加できるように工夫することで、参加しやすく、広く相互理解をすすめることができる。</p> <p>ワークショップ終了時に、成果物(絵の具を使った作品やワークショップの様子の写真)の展示し、広く一般の方にも交流の様子をみてもらうことで障がいのある方への理解を得ることができる。</p>	<p>毎回「楽しかった。」「いやされた。」「またやりたい。」といった感想を得ることができた。</p> <p>第3回目には、幼児(障害児1名)から大人(障害者3名)まで、幅広い方々の参加を得て、全員が楽しい体験をすることができた。「この次はいつやりますか?」という質問もうけた。</p> <p>初めて障害のある方と接する機会を得たという方も多くいて、この体験を通じて、心のバリアを除き、交流することができ、障害を理解する良い機会となったと思う。</p> <p>第3回目は、幅の広い層の多くの参加者を得たが、そのために十分な準備ができていたか?という課題が残った。</p>